街の活力は自立と創造から

あのまちこの街

No. 113

■編　集■ 北海道商店街振興組合連合会
〔あのまちこの街 編集委員会〕
札幌市中央区北１条西２丁目

買収した空き店舗で活性化

次々とシャッターを上げて人の流れを戻す店舗へ改修

三日市商店街振興組合

（石川県小松市）

小松市は人口十一万人で、石川県の西南部にある。加賀平野のほぼ中央に位置し、東に白山を望み、西は勧進帳で有名な安宅海岸が続く。自然に恵まれた県下第一位の都市である。

「小松」の名称の由来には、平安時代中期に花山法皇が「松」を植えたとする説、小松内大臣平重盛の建立した小松寺を由来とする説などがある。

発展の基礎が築かれたのは、加賀三代藩主前田利常公が小松城を隠居地として以来。絹織物、畳表、九谷焼などの伝統産業が生まれていった。中心市街地には城址をはじめ、寺社、町家、蔵、旧銀行など歴史を感じることができる建物が多く存在する。

江戸時代から受け継がれてきた町人文化は、行事や活動に取り入れられ盛んに行なわれている。

同市は住宅の郊外化や公共施設の移転、大型店の郊外進出などで、ほぼ中央に位置し、中心商店街の空洞化が問題となっているなか、商店街が空きビルを買い取り、客の流れを呼び戻そうと試みている。

小松駅前の「三日市商店街」は、建物を安く購入し改装して憩いの場を作った。市が重い腰を上げるまでの交渉は難航した。商店街の粘りの戦略について紹介する。

****

名称　三日市商店街振興組合
所在地　小松市三日市町十八
設立　昭和三十八年
理事長　坂本　啓章氏（洋装店経営）
組合員　二十八名（平成十六年七月現在）
街路延長　二百㍍
主な商店街事業　空き店舗を買収し活用、立体駐車場、伝統行事のイベントなど

共同駐車場の地続き物件を相次いで取得し収益と集客

駐車場は現在も収益源

三日市商店街では昭和五十六年、立体駐車場を建設した。

竣工された駐車場は、二百五十坪に地上六階プラス屋上。四億円をかけた駐車場は、百五十四台が収容できる二十四時間機械自走式だ。五年前に外壁の吹きつけや外階段の改修を行った。

駐車場は、原則として二千円以上の買い物につき一時間、千円につき三十分が無料だが、各店舗の判断に任せている。

共同駐車場事業は、全盛期には年間千二百万円の利益を上げていた。現在、利益は約半分に減ったが、依然として同商店街の貴重な収益源だ。

破たん銀行のビルを買収

買い物客が銀行で用事をすませた後、商店街へ立ち寄ることで多くの人の流れができていた。

空き店舗となってしまった旧石川銀行は、平成十五年三月には土地・建物とも整理回収機構（RCC）の手に渡った。

支店売却先を探すRCCに対し商店街としては深刻な問題を抱えていた。支店の敷地内通路は、商店街の運営する立体駐車場と商店街を結ぶ構造になっていたからである。

RCCは売却にあたり通路の閉鎖を通告してきたのだ。坂本理事長は、車での来街者のために通路を使うことを要請。しかし交渉は難航を極めた。

やがて、なかなか売却先が見つからないRCC側から、建物ごとの購入を提案された。

組合は通路の確保と空き店舗の解消を図るため、春の臨時総会に諮り、総会で加盟店の店主らの了承を得て、建物と敷地の取得を決めた。

建物はRC構造の地上二階・地下一階で敷地は百坪ある。同年十一月に約一千万円で買い取った。

資金は、石川県の融資制度で改装費を含む約二千万円を調達した。

154台を収容する三日市商店街の立体駐車場

新名称で再スタート

所有者が商店街となったことで、市もテナント捜しに協力することになった。

改装された建物の一階には、公共職業安定所（ハローワーク）の出先機関である「小松パートサテライト」、二階は求職者のための育児施設「こまつ育児サポートセンター」を開設。

一角に設けられた「小松パートサテライト」は市のしごと情報コーナーが移転したもの。中高年や主婦らの再就職を支援する。オンラインで、求人情報や全国の就職案内を網羅するシステムが稼働している。

パソコンの検索メニューを通じて職業分野が分かるソフトも導入されている。これは中高生や若年求職者に、将来の進路や意識の喚起を促そうというもの。

オープンに先立ちビルの建物の名称を募集した。商店街の三カ所に応募箱を設けたりチラシを張って公募。百十四通の応募の中から高校生の作品「三日市きまっし★プラザ」と決まった。

昨年末には建物前でオカリナの演奏会を開催、一足先にオープンを祝った。一階のパートサテライトには、一日当たり八十～九十人が出入りするようになり、商店街にも買い物客が戻ってきた。

パートサテライトが入居する「三日市きまっし★プラザ」

競落した空き店舗を活用

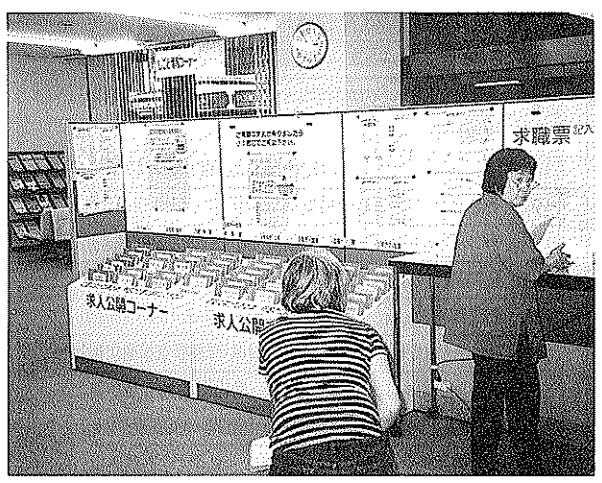
きまっし★プラザに隣接する宝石店は五年前から癒し空間としての広場を整備し、にぎわい創出とらシャッターが下りていたが、三日市商店街では今年二月、この空き店舗（競売物件・約千七百万円）を県の制度融資を受け落札した。敷地面積約四百九十平方㍍の木造二階建て物件である。

この空き店舗の買収に踏みきったのは、旧石川銀行の取得から、商店街再生に必要と判断したからである。

店舗の活用については、賃貸料が確保できる方策を検討中だ。前面ギャラリー、奥にポケットパークなどを今秋に整備、来年三月の完成をめざす。

「改修工事が始まる前でもシャッターを上げて通りを明るくしたい」と坂本理事長はいう。地元商店街が自前で空き店舗を取得するのはあまり例がない。

商店街では客の流れを戻す活性化策として、今後も空き店舗の買収を含む活用を検討している。自らの手で閉じたシャッターを次々と開けていこうという、心意気を感じた。



連日80人以上が訪れるパートサテライト

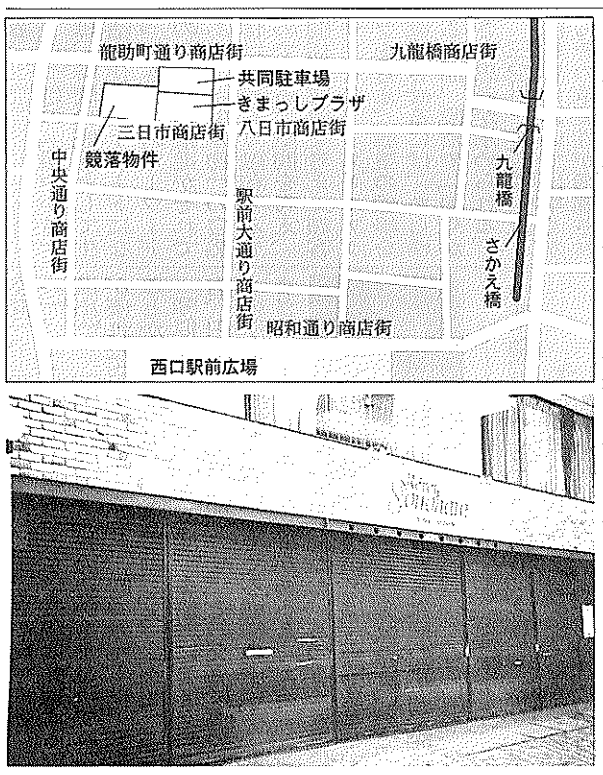
多彩なイベントと販促

商店街内の販促イベントやコミュニティ施設でのイベントは、年間予算四百万円で多彩に実施中だ。

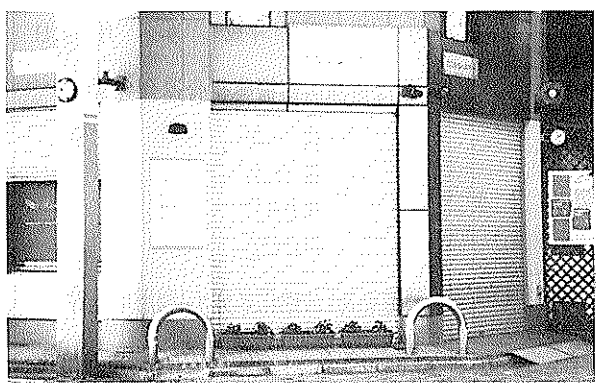
正月の飾りつけは商店主が手作りした大凧あんどんを取り付ける。春は抽選券を配付し、お買上げ毎に応募した中から抽選で蘭の花をプレゼントする「蘭々セール」。

夏のあんどん飾りでは、近隣の美術専攻の学生に絵を書いてもらう。人出の予想される地域のお祭りでは、協賛イベントとして「あんこ餅、きなこ餅」を各店で買い物客に進呈したり、販売したりする。

四季折々のイベントとして、街区の中庭で雪まつり。桜まつりでは夜も開放してライトアップし、三色だんごやお茶の販売を行なう。夏まつりでは七夕笹飾りに商店街より笹を提供する。今年の秋から冬には地元の人々の気軽な作品展や菊、盆栽の展示を行なう予定だ。



三日市商店街が競落した旧宝石店



空き店舗が目立つ小松市の中心商店街

コラム

小松発展を築いた加賀藩主前田利常公。金沢から小松に居を移したのは四十八歳の時。美術工芸、茶道、能などに造詣が深く、多くの名人・名工を寺、神社の造営に招いた。彼らはその後小松に住みつき、その匠の技が山車の造作などに生かされている。

祭りに欠かせない曳山の一七六六年（明和三年）からとされ、多い時には十八基もあったと記録に残る。

市制施行五十周年を記念して平成二年から始まった「曳山八基曳揃え」は、歌舞伎舞台を演出。曳山はライトアップされ、どれも絢爛豪華。華やぎに包まれた二百四十年の時代絵巻は圧巻である。